漢字の字形

白石光邦

漢字の字形についての特質を知るには、文字や「読み」の特質を知るのが早道である。

由来文字の分類については、之を表意文字と表音文字とに分け、表意文字としては漢字を、そして表音文字としては英米の文字やローマ字や仮名をその代表文字としてあげるのが、いはゞ、常識的となつて来てゐて、中には表音文字が表意文字よりもすぐれてゐるのは自明の理であり、当然の帰結でもあるかのやうにいふ人さへもあつた。然しながら之は果して文字の機能や本質を正しく衝いてゐるであらうか。

文字が文字としての機能を果してゐる面を静かに考察してみると、凡そ文字である限りに於て、意味を表はさない、そして又、音を表はさないといふ文字はないであらう。これは文字といふものゝ定義如何にもよることではあるが、凡そ文字である限りは、音を表すと同時に必ず意味をも表はしてゐるとすべきであらう。即ち漢字が表意文字であるといふのは、その起源についてゞあり、欧米の文字やローマ字やそして又仮名が表音文字であるといふのはその構成に関してのことであらう。

所謂表意文字・表音文字といはれるものゝ実際はどういふものであらうか。

なるほど、漢字が象形や指事の昔から段々と今日の字形に到達したことは間違ひない。然しながら今日の字形の「山」に直ちにmountainの意味を表はす表意性があるとは思へないし、事実その表意性がないとすれば、たとへ山扁は山を表はすといふ形声文字ではあつても、「峰」とか「峻」とかの意味をこの字形から直ちに知り得ることはこれ又困難であらう。「山」を「サン」「セン」「やま」と読み且つ意味を取り得るのは所謂漢字学習のドリルによるものであり、それは漢字の字形から来る表意性によるものではないのである。そして又「峰」「峻」はその旁が表音符号であるのは明らかなことであるが、漢字を表意文字といふのはかういふことである。

一方、表音文字といはれる「やま」yamaはどうであらうか。なるほど「やま」yamaが発音「ヤ」発音「マ」をあらはす部分からできてゐることは確かであり、さうしてこれを頼りとして読む限りに於て、読みやすいことも亦確かではあるが、余りに「ヤ」と「マ」の表音性に頼り過ぎて之を学習させる場合は、「ヤ」「マ」は連続した「やま」にならず、「や・ま」となつて意味は消えて了ふ児童があることを吾々は考へねばならぬ。意味の消滅を防ぐとならば、一応発音要素の各部分に分解して教へる

ことを止め、[やま] [yama] は、各〻一つの不可分の文字・符号として、その全形を直ちに発音「ヤマ」、意味 mountain と 教へるに如くはないであらう。事実かうした学習指導の形態があるのであるが、仮名やローマ字を表音文字といふのはかういふことである。

思ふに文字であるといふからには、読みと意味とは同時に持つてゐるとすべきであらう。そこで仮りに両方有して居るものを文字だとすれば、一方を欠くものは文字以下のものとせねばならぬだらうし、仮りに片方だけのものを文字とすれば、両方具へてゐるものは文字以上のものとせねばなるまい。即ち音意二つながら兼ね具へてゐる漢字と音だけしか有せぬ単独の表音文字とは、いはゞ異質の文字である。異質の文字を同列においてその優劣を論ずるといふのは、譬へて言へば、メートルはグラムより長いと言ふが如きものであらう。

端的にいつて山に対応する仮名ローマ字は一つの固りとしての[やま]若しくは[yama]であり、「川」に対応するものは[かわ][kawa]である。従つて漢字一万に対応する表音字形は同じく一万であると言ふべきである。この各〻の一万の字形について、相方を比較して見ると、発音といふ点では表音文字の方がやすからうが、見た瞬間に直ちに概念を摑みとる符号化といふ点では、むしろ漢字の字形の方が優れてゐるとすべきであらう。「や」と「ま」さへ読めれば「やま」は直ちに自ら読める。少数の仮名とアルハベットさへ覚えれば、後は立ち所に数万の言語即ち表語文字が読めるといふ思ひ違ひが従来の論にはなかつたであらうか。

「読む」とは一体どういふ事であらうか。

With this wood, which I strengthened with parts of the masts, I made a flat boat, which we call a raft ……

この英文に於て、仮りに strengthened が strenghened となつてゐても、t の脱落が気附かれずに読み過されるといふことはないであらうか。或は逆に strengthened が strengthend となつてゐる時、最後の e の脱落が異様に読者の目を刺激することはないであらうか。「読む」といふことが文字を頼りに忠実に音声化する（仮令声は出さなくとも）ものであるならば、発音としては大分違ふ strenghened の t の脱落が気附かれぬ訳はないし、発音には関係のない e の脱落が異様に読者の目を惹く訳がない。「文字を読む」といふことは決して単なる音声化といふことではないのである。

get up とか put on とかは文字で書く場合、夫々 get と up、put と on の間に空白があるが、実際の音声言語では getup, puton と続けて発音されてをり、音声言語では in vite と分けて発音されてゐるものが文字として書かれる場合には invite と続けられる。更に之がリズムになると、

The most wonderful thing that can ever happen to any girl happened to me（NHK ラジオテキスト 昭和29年10月号 p.25）

となるさうであるが、これを言ふ通りに、

Themostwonderfulthing thatcaneverhappenedtoanygirl happentome

と書かれてはとても読めるものではない。

何故英米人は発音する通りに書き、書いた通りに発音しないの

であらうか。「文字が言語に隷属する」といふ考へからは、これはをかしなことであるが、これはつまり文字といふものが、抑〻耳とは別箇の理解機関である目を通して見るものであり、字形を通して理解をするものであるからだと私は思ふ。

Themostwonderfulthing thatcaneverhappenedtoanygirl happenedtome.

となるべきものが、

The most wonderful thing that can ever happened to any girl happened to me.

と書かれることは、これ取りも直さず、見る為の語形即ち字形が確立されたわけである。そして、「文字を読む」といふことは「字形を見る」ことであり、「字形を通しての理解」をすることであるのである。

字形を通しての理解作用の第一は音声化作用である。我々が文字を読む時には、仮令それが黙読であつても、多くの場合そこに発音器官に訴へての音声化作用が行はれてゐることを否定することはできまい。そしてこの音声化作用は究極するところ音声言語による理解といふことができようし、文字を以つて音声言語に隷属するとする考へも実はかういふ面から出て来るものと考へられるけれど、文字が忠実なる音声化の媒介物そのまゝでないことは既に説く通りである。

字形を通じての理解作用の第二は、音声器官を通さず、視覚器官を通じて直ちに理解する作用であり、いはゞ音声言語にない、文字言語特有の機能である。さうしてこれについては少しく細説する必要がある。

視覚を通じての理解作用で、最も典型的なものは絵画であつて、これは聴覚による理解作用の音楽と対比される。絵画と音楽とはもともと異質のものであるから、同列に於て優劣を論ずべきものでないことはもとよりのことであるが、「百聞は一見に如かず」の諺通り、ものによつては視覚的理解が聴覚的理解の企て及ばぬ効果を発揮することは既に明かなことである。さうして文字の本質そして又字形の本質を論ずるに当つては、まづ以つて文字の有するかゝる視覚的長所の認識から出発するのでなければなるまい。

音声言語は音をもつて行はれる。音には音差があり、強弱があり、高低があり、抑揚があり、リズムがあり、休止があり、更には又、音声言語の行はれる場面があり、身振り手振りがあり、態度がある。実に音声言語はかゝる諸種の援護の下に始めて遺憾なく行はれてゐるが、之に対して文字言語は、活字の大小や組方の高低や、行替へや、句読や、その他諸種の符号の助けの下に始めて十分にその働きを全うするものである。即ち字形とはこれら諸種の目で見る技術の上に立つてゐる符号なのである。字形を論ずるに当つては、まづ以つてこの事をハッキリと認識してかゝる必要があらう。

所謂表音文字といはれるものは、その文字の構成が表音的になされてゐるから、学習の手段として之を利用すれば、成程読みやすいといふ利便はある。然しながらその利便に頼りすぎて訓練を怠ると、それは何時までもヨチヨチ読みであり、校正的読みであつて、音声言語の域を脱することができず、真の読みには近づけない恐れがないとは言はれまい。即ち仮令表音文字とはいへ、高

度の読みは、文字の表音的束縛を脱して、符号的読みに移つてゐることを吾々は知らねばならぬ。この点、漢字は、従来の学習が始めから之を符号的に扱つてゐる為、習得するまでの困難は兎も角として、一旦修得すれば、直ちに字形を通じての視覚的理解即ち真の読みに入りやすい長所がある。

盲人が目なくして事を弁じてゐるからとて、目なくして可なりと言ふことはできまい。又聾者が耳なくして用を足すからといつて、耳は不要の物であるといふこともできまい。実に今日の人類の文化は目や耳やその他多くの器官の協力の御蔭によつて、創造され、維持されて来たものであり、明日の日の人類の文化も亦そのやうにしてこそ始めて期待されることを吾々は知らねばならぬ。従来の国字論若しくは国語改造論の、目で見なければわからぬ言葉は使ふなといふ論は反省を要しはしまいか。それは目で見なければわからぬ言葉を耳で聞く場合に使ふなといふことでなければならぬと私は考へる。文字はそして文字言語は抑〻が目で見るといふ基礎の上に立つてゐるのである。

文字の視覚性といふことについてモット突込んで検討してみよう。

(1) 「ヅック靴」と書いてある店頭の看板を見て、あれは何だと見直してみると、それは「ズック靴」のことである。今日の大多数の日本人は「ズ」と「ヅ」の発音の区別はないのであるから、文字が只単に音声を表はすだけなら、それは「ズック」でも「ヅック」でもよささうなものゝ、「ヅック」に吾々が抵抗を感ずるといふのは、「ヅック」が吾々の見慣れた文字ではないからである。見慣れぬ文字に抵抗を感ずるといふことは、明らかに、文字は目で見るものであることを証明してゐる。

「ズック」ならば見て直ちにわかる。これは文字本来の性質である視覚的理解がそのまゝ行はれてゐるからである。「ヅック」ならば、わかることはわかるが、不愉快であるのは、一度これを「ズック」と音声語化して理解してゐるからで、それは文字本来の目での理解から、耳での理解へと、理解の様式が違つてゐるのである。抵抗を感ずるとか、慣れの問題とかいふことを私はこのやうに解する。

「伝記」とか「伝説」とかには大部慣れた今日ではあるけれど、「手伝賃」ともなれば、暫く考へることからすると、一口に「慣れ」と言ふが、只単に伝即傳に慣れるだけではいかぬものと見える。

(2) 「元気ずける」は、「づ」と「ず」の取違へであるといふ点では「ヅック」と同じであるが、これは簡単に「慣れ」の問題といつて片附ける訳には行かないのではないか。

「元気づける」は「現代かなづかい」に言ふ二語の連合であつて、この語の中には「つける」といふ概念が明らかに入つてゐる。従つて字形としては「ずける」よりは「つける」に近い「づける」の方が視覚的理解としては適当といふことになると同時に「ず」といふ字形は、現在の日本の表記法からすると、否定概念を伴なひ易いといふこともあるのではなからうか。さうしてかういふことは只単に「慣れの問題」といふことでは解決できないことではなからうか。「現代かなづかい」の二語の連合とか、助詞の「は」「を」「へ」とか、「いう」(言)の特例とかはこのやうに理解することができる。

(3) 猛烈な勢で英会話の流れが押し寄せて来る。何もわからない。たま〳〵 fifty といふ音がハッキリと耳に聞える。fifty だな、fifty だなと思つても、意味が頭にはピンと来ない。数字であることはハッキリわかつてゐても、それからがわからぬ。会話から落伍して、暫く考へてゐるうちに、頭の中にひよいと50といふ字形が浮んだ途端に、始めて fifty の音の意味がわかる。この場合吾々は fifty といふ言葉を音によつて理解するのでなく、脳中50に描かれたといふ字形を通じて理解してゐる訳であるが、これで見ると字形は紙の上にあるだけでなく、脳裏にも焼付いてゐるらしい。

(4) 音声言語としては余り適当ではなくとも、視覚言語としては効果を発揮してゐるといふ言葉(?)を、あれやこれやから、少しばかり拾つてみよう。

鳩自(鳩山自由党)、吉鳩会談(吉田・鳩山会談)(新聞見出し)

卒中が助かる。倒れても一時間以内にネオフリンを静注すれば……(衛材月報)

自衛戦力は合憲——改進憲法九条で統一解釈(新聞見出し)

要整理者を最も多く出している化学繊維界について見るに(新聞社説)

帯気密閉音。聴覚的所与(ソシュール言語学原論、小林英夫訳三九頁及び五五頁)

言連鎖を等質的聴覚位相に分析(同前五七頁)

BBS運動とは Big Brothers and Sisters Movement のことで大兄姉運動とも呼ばれています(新聞記事)

かくて〃新記録が実現〃——砲丸弾道を45度に——(後ろ向き始動、一メートルも低い姿勢)(新聞見出し)

これらの言葉は、なるほど、音声言語ではわかりにくい言葉かも知れぬ。然しながら etc. とか Mr. とかSEATO式の略字、略語は各国語の共通の現象でもあるやうだし、又、これらの言葉が新聞に頻発するところから見ても、紙面を極端に節約する新聞からすれば、これらの、いはゞ視覚言語を追放できる訳でもあるまいし、更に考慮を要することは、これらの視覚言語の中で、世人の支持を受けた言葉が、俄然次の時代の音声言語になるといふことである。

思ふに、規覚専用語を日常の音声言語に使用するのは、言語の罪ではなくして、使用する人の責任であらう。視覚言語は視覚言語として、そして又、音声言語は音声言語として使用する訓練、それこそが今後の国語教育の一つの重要な目標であると私は考へる。即ち、文字は視覚的長所の上に立つて、人類の高度の文化の維持創造の為に、その威力を発揮すべきものと私は考へる。

文字の視覚的理解は大凡そ以上の如くであるが、尚こゝで、その理解の中の立体的理解について一言触れてみたい。

毎日新聞の昨年の九月一二日の投書欄に次のやうな記事が載つてゐる。

過日私は小学校二年程度のある雑誌を見て「ねばあるでは……」と書いてあるので何が書いてあるのか最初はピンとこなかった。よく考えると「ネパールでは……」と書いてあるのだ。云々。

尚、この記事が契機となつて、同月二五日には次のやうな投書が

出てゐる。

子供が投げ出して行ったデスク・マークのある小学二年程度の雑誌を何気なくのぞいてみると「あめりかのおはいおしゅうのひいとんという」等と書いてある。おやっと思った。なるほどわかりにくい。云々。

「あめりかのおはいおしゅうのひいとんという」をわかりやすくする為には「アメリカのオハイオ州のヒートンと言う」と書くのも一つの方法であるが、私はこれを立体的視覚言語と呼ぶのである。私は視覚言語は表現も理解も共に立体的になさるべきものと信じてゐる。

さんまにがいか
しょっぱいか？
からすととんび

これではなか〳〵わかりにくいけれど、実際に新聞には、

サンマにがいか
しょっぱいか？
カラスとトンビ

と書いてある為にいささか読みやすくなつてゐる。

らじおおまいにちきいている
らじおをまいにちきいている
ラジオを毎日聞いて居る

この三例を比較してみると、人によつて意見は違ふかも知れないが、「ラジオを毎日聞いて居る」が一番わかりやすいと私は思つてゐる。

ヒサカタノ（枕詞）都を後にして、クサマクラ（枕詞）旅行く君をば、何時と待たうか。（土屋文明著万葉集私註第十三巻六六頁、三二五二番の歌の大意）

底なし『ウのみ』芸――森の番人に〃リベート魚〃（毎日新聞昭和二十九年七月十二日）

漢字があり、平仮名があり、片仮名があり、そして、（）や『』や〃〃の符号がついて、人はその繁雑を歎くかも知れない。然しながら視覚言語を立体的にわからせる為にはこれらの方法は絶対に必要である。つまり字形といふ視覚符号はかくしてこそ始めて高度の視覚言語となり得るのであつて、それは宛も音声言語が音の強弱高低等の援護によつて行はれるのと同様である。

「そこなしうのみげい」は、たとへ文字で書いてあつても、実はそれは音声言語になり易い。そして文字で書いてある音声言語といふものは、決して分りのよいものではない。これをわかりよくする為に「底なし『ウのみ』芸」の表記が出てくるのは、これ即ち見る為の字形の発生である。それは取りも直さず「そこなしうのみげい」は、かゝる表記法によつて始めて字形が「底」「なし」「ウ」「のみ」（そして又『ウのみ』）「芸」と分けられて、視覚に堪へ得るやうになるのである。分ち書きの必要はこのやうにして生ずる。

二まいがいはしぬとなぜかいをあけるか。

では、まるで分からんと思ふが、これを、

二まいがいは　しぬと　なぜ　かいを　あけるか。（なぜなぜブック二年の学習、昭和二七年一二月号附録）

と表記すれば、大分わかりやすくなるし、

ははのいえまえ

といふ田圃の中の立札は、

ははの いえ まえ

とすれば、一語一語の意味は大分ハッキリとして来る。だこゝで注意をしなければならんことは、たとへ分ち書きしても、それらは「二枚貝は死ぬと何故貝を開けるか」「母の家前」と漢字で書いたのには及ばぬといふことである。殊に「ははの いえまえ」では如何にも寸断されたといふ感じであるが、「母の家前」では即かず離れず恰好よく納まる。

「二まいがいはしぬとなぜかいをあけるか。」は「二枚貝は死ぬと何故貝を開けるか。」よりも遙かに分りにくいとせねばならん。であるのに、今の日本の表記は、分ち書もせず、漢字も使はないで、このやうに分らぬ表記の「かな書」へと一路突入しつゝある。今新聞の中から数例を拾つてみよう。

大宮よとくなれ

心宮わくやつくりせばや ささやけき

水あつまりて滝つ瀬なすを（昭和、二六、一〇、四、毎日新聞、佐々木信綱博士の歌）

多少形勢がよいという時が曲者なのだ。そこに心のゆるみと、危い橋を渡らぬようにというしゅくした気持が生じる。（毎日新聞、昭和二八、七、三一）

いのちかなしき川太郎 のむやきゅうりのひとり酒（毎日、二九、九、九）

それが復員後八段になってからが然本来の調子と自信とをとりもどして勝ち続け云々。（毎日、一一、二九、一一、二三）

流れるはずんだ活気（毎日新聞、一〇、二八）

ロープからませ頭突きでニューマンを攻める遠藤（毎日新聞、二九、九、四）

四人の潜水夫がぶつぶつ水あわを残して海面から姿を消したあとにはさつき丸の上で送気するポンプの音があわただしそうに息をはずませるだけ。（毎日、二九、九、二九、）

ハワイロケ大ばやり（毎日、二九、九、四）

甘木にわかと操人形（毎日、二九、八、三〇）

以上の例から見てもわかるやうに、漢字の追放は、「とく」「わくや」「つくり」「いしゅく」「のむや」「が然」「はずんだ」「からませ」「さつき丸」「ハワイ」「ロケ」「にわか」等の、見る為の字形の確立即ち分ち書の実行と同時になされるのでなければ、悔を千載に残すことになりさうである。

視覚を通して直ちに理解しようとする時、文字の字形の持つてゐる意義は右のやうに大きい。従つて見る為の字形としての要件を今考へてみるに、大凡そ次の事が必要とならう。

第一、字形相互の鮮かな相異

「喧しい」と「疾しい」では相違がハッキリしてゐるが、「やかましい」と「やましい」とでは差が少なくなる。松田八段対升田八段（王将挑戦者決定戦）が「マツダハチダン」「マスダハチダン」では大分音声語化する。同じローマ字でも Matsudahachidan Masudahachidan はまだいゝとしても MATSUDAHACHIDAN MASUDAHACHIDAN では俄然相異がなくなる。「學」と「字」とは紛れることはないが、「学」と「字」は大分接近するし、「文学」と「文字」、「数学」と「数字」ともなると、ウッカリすると間違へる。

第二、一目で見えること

一目で見える為には字形が短小でなければならぬ。字形が短小

であることは、不必要な紙数や眼球運動を節約できるばかりでなく、次のやうな例からしても、字形の重要な要素となる。

寄生虫研究に友情の資料——タイから九大へ雷魚、ナマズ（毎日新聞見出し）

この「タイ」が「鯛」でなく、国名であることを決定してゐるのは、この字の前には何もなく、「タイから九大へ」の一連の文字から来る常識判断である。従つてこの場合「タイから九大へ」の字形は同時に視覚に映るのでなければ、「タイ」は鯛とも受取れて、理解に食ひ違ひが起る。

〃しいのみ学園〃開く（この間写真挿入）

貫いた親の念願

育つ精神薄弱児

教授はまく〃一粒の実〃（毎日新聞、九、四、五、二）

この「まく」が「巻く」でも「負く」でもなくて、「播く」であることを決定してゐるのは、写真を隔てゝ遙に呼応してゐる「しいのみ学園」の〃しいのみ〃と〃一粒の実〃といふ後に続く文字とである。そして〃しいのみ〃と「まく」の修辞的呼応は、恐らく、読者の念頭には稀薄であらうし、「教授はまく〃一粒の実〃」は一目で見る字形としては長過ぎるし、従つて当然、「巻く」か「負く」か「播く」かを未決定のまゝの「まく」といふ字形から受ける感じは、宛も不鮮明な眼鏡で物を見るが如く、不愉快である。尚、活字の組方の都合で次のやうな表記を読まされるのも頗る不満である。（一字脱きの所で行が変はる。以下の例も同じ。）

〔前略〕マン　ガになると地上最大の？悪人　面には書かれるし　とっつき　がぶっき　らぼうな　のでマイ　ナス点ば　かりのよ　うだが、　こっちが　無愛想を　百も承知でつき合　ってみると案外スルメくらい　の味がしないでもない。（毎日新聞二九、七、二七）

字形が一目で見えて短小であるといふことは、結局字形のまとまりにもなり、それが符号化しやすいもとにもなる。「九百拾四」には多分に音声化傾向が認められるに反し、914には大いに符号性が感じられる。

第三、定形性

音声言語に於ても発音やアクセント等に一定性が要求されるごとく、視覚言語に於ても字形の一定性が要求される。「中華料理らいおん」（町の看板）、「ゆうもあ芸談」（毎日新聞、九、二九、二）等を見て、吾々が変に感ずるのは、「ライオン」「ユーモア」の字形を期待してゐるからであらう。「没収」とか「編集」とか「払わない」とかについて初め異様に感じたのも、それらが見慣れた字形とは違つてゐたからである。

国字改良といふ一大壮挙の為ならばいざ知らず、いはゞ気まぐれに当用漢字内の字まで次のやうに書くことは慎しみたいものである。

冬は食ジがどうしても酸性のものに傾きやすいのでつとめてアルカリ性食ジを心掛けてとらねばなりません。（毎日、二、二九、二六）

「モメンを使つて」「出そろった〃星〃と〃イカリ〃」「世界初の短編集（国際オムニバス）映画—題材『しっと』が選ばる」などは当用漢字で制限された必然の結果の表記には違ひがないけれど、「モメン」「イカリ」「しっと」の字形が「木綿」「碇」「嫉妬」と同

じやうに脳裏に焼付けられるのは幾何の時日を要することであらうか。

字形をそのまゝ視覚言語として受取れる域にまで達するのは並大抵のことではないと思はれるのに、片かなから平がなへ、（或は平がなから片かなへ）そして又漢字やローマ字へと、折角獲得しかけた字形を惜し気もなく捨て去る日本の文字指導はこの際峻厳に批判さるべきである。

第四、同音異義語の区別

同音といつても、音声言語の場合は、音の高低強弱の差があつて、言葉としては紛れない場合がしばゝ〳〵ある。音声言語としては異なるものを文字としては同じものになるといふのでは、文字が正しく機能を発揮してゐるといふことはできなくなる。

福岡の〝かき〟は大減産（毎日、一一、一八、）

カキ（毎日、二九、一〇、〝茶の間〟の題）

かきとレモン（毎日、八、一、七）

右の三題のうち、初めの二つは柿であるが、最後のものは牡蠣である。これらは題を見ただけでは、判断のしやうがないが、中の文章を読んでみて飜つて題の意味がわかるといふのでは面白くないし、題にだまされて中味を読み始めるのは尚更不愉快である。而もかういふことが度重なると、「がん」は雁か癌か、「ノリ」は海苔か糊かと段々不安になる。単語の意味は文脈の中で自ら決定されるといふけれど、一概にさう簡単にばかり片附けられぬ所に人間の文化の複雑さがある。どうせ漢字を使はぬとならば、柿は「かき」、牡蠣は「カキ」とでも書き分ける必要がありはしまいか。

共時態には一つの眺望しかない、即ち話手のそれである、その方法を彼らの証言を集めることに尽きる。ある物がどの程度に実在であるかを知るには、それが主体の意識にとつてどの程度に存在するかを、探究せねばならないであらう、又それで充分であらう。（ソシュール言語学原論、小林英夫訳改訳新版一二〇頁）

右の「ある物」が「或物」か「有る物」かに書き分けてあれば、読者は、どれだけか、不当に頭を酷使されずにすむことであらう。

日本語の表記法は今乱雑そのものといつていい。そして、目は耳と共に文化を受け容れる二つの重要な門であることを考へる時、吾々の明日の文化が果して次のやうな乱雑無統制な吾々の表記から期待できるであらうか。

扇情的（朝日、二、二六、声欄）

浅間山大爆発す——噴煙中天七千メートルに（毎日、二五、九、二四）

たまがさけのあきかんを頭からかぶって、大あばれの最中なのだ。（垣内松三編中等新国語言語篇一、一一五頁）

嫁としゅうとめと　小じゅうとめについて（毎日、二、四、二九、）

今秋の　カゼの特徴であるセキ止めの薬に　は鎮咳（ちんがい）剤と祛痰（きょたん）剤とがあります。（毎日、一一、三、二九、）

絵とき日本地図ちょう（四年の学習、二、九年六月号附録）

保母の資格について（毎日、一〇、二九、）

今年の車両界を語る（毎日、一、九、三〇、）

ダイコンとトリだ　んどのスープ煮（毎日三〇、二、一一）

以上吾々は漢字の字形を論ずる為に、文字の本質を見、字形の本質を検討して来たが、飜つて、こゝで、漢字の字形の本質を確めてみよう。

(1) 所謂表音文字に比し、漢字が不当に字形が多いとするのは誤りである。
(2) 現在の字形に表意性はない。
(3) むしろ大多数の漢字には表音符号がある。
(4) まとまりがある。
(5) 短小である。
(6) 相異性がある。
(7) 符号化しやすい。
(8) 分ち書き以上の効果を発揮する。
(9) 漢字と仮名との混合体には立体感がある。
(10) 同音異義語の区別ができる。

漢字には以上のやうに、多くの、文字としての長所があるにもかゝはらず、明治以来否定的にのみ見られて来たのは一体何が故であらうか。

思ふに、すべては漢字が、書くにも読むにも頗る困難であつたので、自然漢字の持つ長所は覆はれて、その本性が見失はれて了つたといふのであらう。

従つて漢字が将来日本の国字として残り得るか否かは、一にかゝつて漢字の読み書きの容易化が何処まで成功するかにあると言つても過言ではない。吾々は今こそ吾々の文化を守る悲壮な決意の下に、常用漢字の妥当な制限と字形の思ひ切つた改善との両面から、漢字の読み書きの簡易化を断行せねばならない時と信ずる。

そして日本人の常用する約五千数百の字形を精査すると、それらの基本となつてゐる字形は約二七〇であり、後はそれらに「丶」「丿」「一」「丨」の補助形が添加されたり、或はそれらのものゝ相互の組合せ（会意、形声等）に過ぎないものとなるから、いきほひ、漢字の全般的簡略化を企図するとすれば、これらの基本形とか、形声文字の構成要素である意字・発音符号とかの簡略化がその骨子となつて来ざるを得ない。

然しながら斯くの如くして、今後適当の改善を施してさへ行けば、漢字の面目が一新することは必定である。「驢」の「馬」をまづ簡単な符号に作り替へ、「盧」の発音符号は「ろ」「ロ」若しくは他の適宜の符号で代用するとすれば、「驢馬」の「驢」は立ち所に、読み易く、書き易く、而も漢字としての機能は落すことなく、国語の性質とも渾然として融け合ひ、古典へも繋るといふ文字になる。そしてそれはむつかしいことではない、現実に已に「詳」（議）とか「枠」（機）となつて世間で行はれてもゐるし、当用漢字の新字形「図」も、中を「ヅ」に置きかへるか、「义」をヅの符号だとすれば、直ちにかういつた式の漢字になる。或は又、字によつて漸進を可とする場合には蠶→蠶→蚕→蚕の方式を取り、最後に「蚕」の「天」を「サン」の発音符号に持つて行く。（但し何れにしても牢記すべきは仮すに長年月を以つてすべきであり、文字軽視の風の警戒である。）

さて以上の見地から、当用漢字の新字体を見た時に大凡そ次の

事がいへるであらう。

(1) 全般的統一的考慮が欠けてゐる。（仏・払の線を押し進めると「費」は「貮」となつて、「員」の同字の「貮」と同じになる等。）

(2) 字によつては今後の漢字学習を著しく困難にしてゐる。（暁・狭・遖・夢等の如く、今までなかつた基本形を造り出したり、衷（衣と中の合字）廷（壬と廴の合字）や与（與）と誉（譽）との関係の如く、発音符号の体系を壊してゐる等。）

(3) 不徹底である。（卒と砕粋酔、濁と独触等。尚、登（教育漢字）黄（教育漢字）聴（当用漢字）を残しながら、灯・広・庁の字体を採つたことも災を後に残したことになつてゐる。即ち「丁」は発音符号としてはテイ（訂酊亭等）、チャウ（町疔頂等）、ダ（打）チョ（貯佇）、トウ（灯）の数音があるとせねばならぬし、「ム」は仏払私弁公台参等から見て、とても発音符号とはなり得ない。今暫く燈廣及び广と聴の組合せ字を残すこととし、登黄聴に簡略化を施すか、或はトウ、コウ、チョウの一音発音符号を新に作製するかするのが賢明であらう。）

(4) 字形の相異性の減少してゐるものがある。（辯・辨・瓣は弁となつたので字形の相異は全くなくなつた。学と字、沿（沿）と浴、専（專）と博縛等の発音符号等も相異性は減少の方向に向いてゐる。）

以上之を要するに、漢字の字形は文字として優れた機能を有してゐるし、字形改善の見込もあることであるから、文字の一定性を守る上からも、当分は漢字を国字の正字の位置に置くべきものと私は信ずる。

当用漢字の新字体についてはいろ〳〵と問題があるが、私に与へられた紙数も越したことだから、それは又改めて書かせて貰ふことにしたい。尚、新聞の引例が毎日新聞に偏つたのは私の購読新聞だからである。

——福岡学芸大学教授——